

収藏品展 身のまわりの生活史3

冬の訪れ

会期 16年12月11日(土)～17年3月13日(日)

Tel 0480-34-8882 Fax 0480-32-5601

ホームページ <http://www.town.miyashiro.saitama.jp>

Eメール museum@town.miyashiro.saitama.jp

展示図録

宮代町郷土資料館



凡例

- 本書は、平成 16 年 12 月 11 日から平成 17 年 3 月 13 日まで開催される、宮代町郷土資料館平成 16 年度企画展「収藏品展 身のまわりの生活 3 冬の訪れ」の展示図録です。
 - 本書並びに展示に使用した写真は、一部を除き当館学芸員が撮影・複写しました。
 - 図録の掲載は展示順序を示す物ではありません。
 - 展示の企画及び図録の執筆・編集については当館学芸員の横内美穂が担当し、表紙・図録デザインは長谷川弘樹が担当しました。
-

春夏秋冬、四季の移り変わりは私たちの暮らしや心にさまざまな形で作用していることは皆様ご承知のとおりです。先人達はこうした、四季の移ろいにあわせた生活の様式や道具類などを生み出し、それに適した暮らしの在り方を工夫して生活してまいりました。また、それらの道具類は単に利便性だけを求めたのではなく、人々の思いや心加わり、より豊かに装飾された道具類が作られてまいりました。



現在、資料館には日々使われた道具や衣類、その他、数多くの資料を収蔵品として町民の皆様から寄せていただいておりますが、これらの資料を一つひとつ見ていくと、先人たちの知恵や工夫に新たな発見をすることが多くあります。

今回の展示では、「冬」をキーワードに、収蔵品の中から冬に関するものを選び、展示しました。これらの展示品から、先人たちの暮らしぶりをしのび、また、現在の私たちの暮らしぶりへの変化に目を向けていただければ幸いです。

最後に、これらの展示品をはじめ多くの貴重な資料が寄せられておりますが、これらご協力賜りました方々に厚く御礼申し上げますとともに、今後も、人々の暮らしぶりを後世に伝えるためにも皆様のご協力を一層賜りますようお願い申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



暖をとるために…

ここ数年、「地球温暖化」という言葉を意識してしまうような気候が続いています。平成16年も終り近くになった12月に入ってから「夏日」を記録しました。

現代は住宅の建築技術や暖房設備の変化により、四季を問わず家などの建物の中においては快適な温度で生活することもできるようになりました。

しかし、冷暖房機器が家庭に入る前には、夏は暑く冬は寒いといった生活でした。人々はいかにして暑さをしのぎ、寒さをやわらげようか、家の建築構造を始めさまざまな工夫をしていました。ことに冬は家の中では、火鉢やこたつが家庭の団らん場にあり、ゆたんぼが安らかな睡眠を促しました。このコーナーでは、冬の寒さ対策に活躍をした道具類を展示しています。



◀ 陶器製の火鉢
両側には虎の飾りがあしらわれている



▼ 特徴的なフタの付いた
金属製の火鉢



木製の火鉢と
その小型版で通称「手焙」▼



全体が鳳凰の模様で覆われた火鉢
フタをした時はコタツとしても
使用できる ▼



火鉢は、中に灰を入れ、炭火を中にいけて手を温めたり湯茶を沸かすための器具です。大小さまざまな大きさが作

られ、目的により使い分けられました。特に小型のものは手焙とよばれ、手を温めるためだけに用いられました。材質も木製・陶器製・金属製などさまざまです。木製の火鉢には銅や真鍮といった金属が内側にはりつけてありますが、これを「落とし」と呼びます。

機能性だけでなく、外側の装飾にも趣向がこらされたものが使われるなど、冬のインテリアの一つとして重視されたことがよくわかります。

いろいろな火鉢

ゆたんぼは、陶器や金属でできた容器にお湯をいれて布でくるみ、寝るときに布団を温めるために用いられました。お湯を入れて使うため、その熱さには限界がありましたが、火種がないことから火事をおこす心配がなく使用できる器具でした。

現在でも、金属やプラスチックなどを使用したゆたんぼが販売されていますが、材質が現代風に変わったものの、今なお愛用され続けています。



▲ ゆたんぼ (陶製)



▲ ゆたんぼ (陶製)



▲ ゆたんぼ (ブリキ製)

▶ 足炉



足炉 (あしろうとも読みます) は一般的には足焙 (あしあぶり) といいます。炭火を中に入れ、文字通り足をあぶって温めるために用いられた器具です。火鉢 (ひばち) の一種であり、手炉 (てあぶり) ・手焙 (てあぶり) が手を温めるためだけに用いられた火鉢であるのと同じように足専用の火鉢であるといえます。

また「足炉・足焙」は俳句では冬の季語として用いられます。

時代が進み、ゆたんぼに代わるものとして生まれたのが電子あんかです。それまでとは違い、安全な温度を一定に保つことができ、温度固定式の電子あんかに対し、電気こたつでは温度調節をすることもできました。電子あんかに続く寝具として開発された電化製品としては、今では一般的になっている電気毛布をあげることができます。

▶ 電子あんか (昭和40年)





▲ 放熱式電気こたつ（昭和 40 年代）
昭和 30 年代後半に開発された仕組みにより、任意の温度を安全に保って使用できるようになった。



▼ やくらこたつ
木枠の中に火鉢を入れ、その上から布団を掛けて使用する。季節感がある為、浮世絵の題材としてもよく取り上げられた。

※ 参考イメージ
春信画 風流江戸八景 真乳山の暮雪



冬も活躍

四季の移り変わりは、太陽の動きによって日照時間^{にっしょうじかん}が変化することにより生み出されます。夏の日照時間が長い反面、冬は日照時間も短く、日暮れ^{ひぐ}が早くなります。

日々の暮らしにおいて、季節に応じた作業があった頃には、冬の夜長^{よなが}も冬ならではの作業を行なうための大切な時間でした。そういった時に活躍^{かつやく}したのが、明かりです。

このコーナーでは、いろいろな明かりとして蝋燭^{ろうそく}を用いたもの、灯明油^{とうみょうあぶら}を用いたもの、さらには近代的な石油^{せんにりよう}を燃料としたランプなどを展示しています。

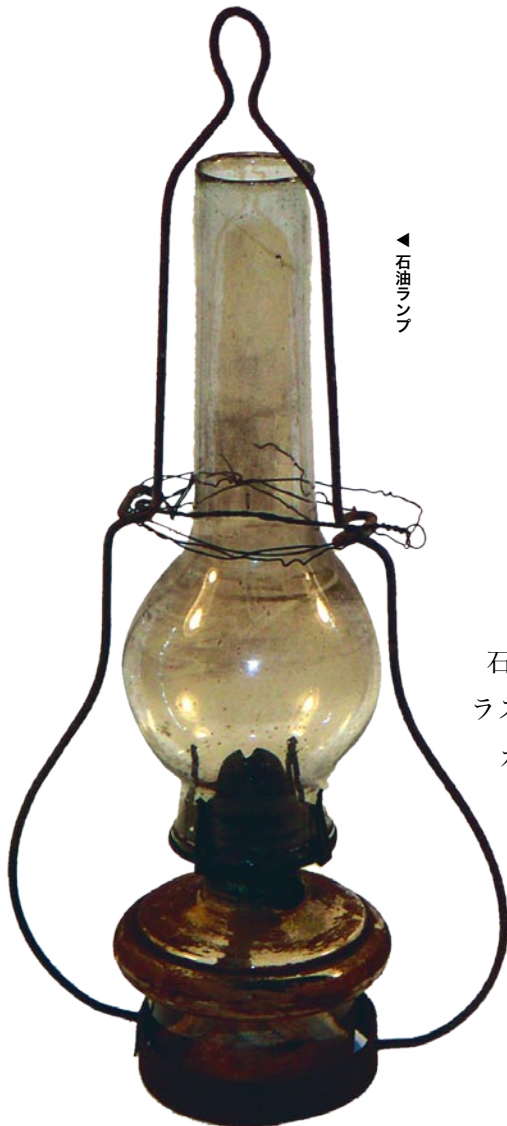




灯明台 ▲



▲ カンテラ



▲ 石油ランプ

石油ランプは、^{とうゆ}灯油を燃料とするランプです。金属製もしくはガラス製の^{あぶらようき}油容器・^{くちかなもの}口金物・ほや（火屋と書く。ランプの火をおおうガラス製の筒をさします。）・^{かさ}笠などから成ります。置いて使う^{だい}台灯と釣って使う^つ釣りランプがあります。（展示しているのは釣りランプです。）ほやは^{すす}煤で黒くなりやすいのですが口の部分が狭いため、ほや磨きは手が小さい子どもたちが活躍できるお手伝いの一つでした。

カンテラは、^{ちようちん}提灯や^{とうだい}灯台という意味の名前です。ブリキの^{あぶらつぼ}油壺のなかに灯油を入れ、^{めんし}綿糸を^{しん}芯として火を^{けいたいよう}点じ、携帯用に用いた照明器具です。

冬の楽しみ

冬の代表的なスポーツとして、スキーをあげることができます。スキーは明治44年(1911)初めて日本にもたらされ、以来、人々の間にひろまりました。

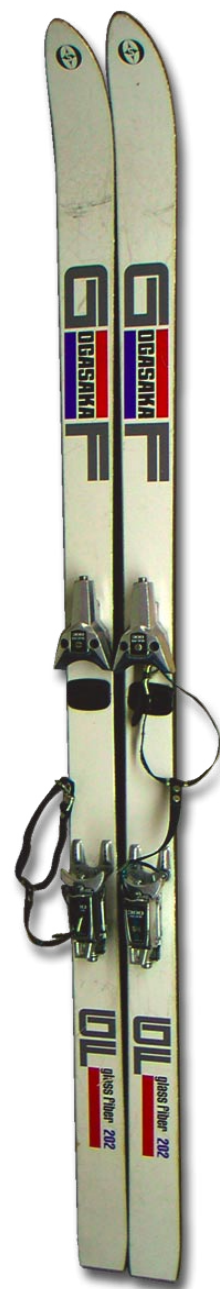
スキーの道具には板とストックがありますが、それらもさまざまな改良かいろようが加えられ、現在の形・材質ざいしつになってきています。

このコーナーでは、昭和20年代頃から50年代頃のストックを展示しています。竹で作られたストックが改良され、現在のカーボン製になりましたが、その変化を比較ひかくしてみてください。



▲ スキーストックの変遷

昭和20～30年代、ストックは竹を竹刀のように組んだ形が主流で、グリップ部分や竹製リングの固定には牛革ぎゅうがわが利用されていた。30年代後半には、耐久性を増した金属製のリングを革で固定するようになり、40年代に入ると金属製のパイプにゴムで固定されたリングなど、材質に大きな変更がみられる。変化はさらに進み、グリップも革製から指のくびれの付いた樹脂製になり、リングも固定部分と一体となった現在の形がこの時期にはほぼ出来上がる。またリングの大きさや形にも変化がみられる。現在では、丈夫で軽量のカーボンと特殊な樹脂で製造され、形も様々に変化している。



▼ スケート靴
ハーフスピードスケート用
(昭和40年代)



▲ スキー板 (昭和55年頃)

スキー靴を固定する金具であるビンディングには、まだすべり止めの棒ぼうがついていません。そのため、板がはずれた場合には斜面を板だけがすべり落ちていってしまい、斜面の下のほうにいる人たちにとって危険なこともありました。そのため、板がはずれてしまっても滑り落ちていかないようにするために、足首に巻いて留めるためのベルトすべがついています。



宮代町郷土資料館